



Title	天津彗星の解釈について
Author(s)	勝俣, 隆
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 44, pp.1-11; 1992
Issue Date	1992-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/33156
Right	

This document is downloaded at: 2019-01-19T11:02:16Z

天津甕星の解釈について

勝 俣 隆

On the Star "Amatsu-mikaboshi"

Takashi KATSUMATA

日本書紀神代下第九段本文には次の如き記述が見られる。

誅ひて、然して後に下りて葦原中国を撥はむ」とまうす。

是に、一、二の神、諸の従はぬ鬼神等を誅ひて、一に云はく、二の神遂に邪神及び草木石の類を誅ひて、皆既に平けぬ。其の服はぬ者は、唯星の神香背男のみ。故、加倭文神建葉椎命を遣せば服ひぬ。
・・・果に復命す。

ここには、武甕槌神と経津主神の二神が、あらゆる邪神や草木石の類を平定した中で、最後まで服従しない神として星の神天香背男が登場する。

一方、日本書紀神代下第九段一書第二にも次のような記事がある。

一書に曰はく、天神、経津主神・武甕槌神を遣して、葦原中国を平定めしむ。時に二の神曰さく、「天に悪しき神有り。名を天津甕星と曰ふ。亦の名は天香背男。請ふ、先づ此の神を

この第九段一書第二の記事と比べると、第九段本文の記述に出てくる香背男は、天香背男の省略形であろうと推測される。それ故、香背男と天香背男を同一神と考えて、上記二つの記事に登場する天津甕星、別名天香背男とは如何なる神か、種々の観点から検討してみたいと思う。なお、本稿では、天津甕星と天香背男を特に区別する必要のない時は、天津甕星の表記で代表する。

一、天津甕星についての諸説

天津甕星についての現在までの主な説は次の通りである。

(1) 神威の大きな星、あるいは、単に、星の神として、星を特定せず。日本古典文学大系『日本書紀』、上田正昭『日本神話』

時代別国語大辞典上代編等

(2) 天にあって(身が)輝く星の義 飯田季治『日本書紀新講』

松岡静雄『日本古語大辞典』

(3) 金星(明けの明星)の呼称 平田篤胤『古史伝』、野尻抱

影『星の神話伝説集成』の第一説 武田祐吉『日本古典全書

日本書紀』

(4) シリウス(天狼星)の呼称 野尻抱影『星の神話伝説集成』

の第二説

(5) 妖星(彗星、流星)・天狗星(巨大流星)となって天下に禍

害を為すものの呼称 谷川士清『日本書紀通証』、飯田武郷

『日本書紀通釈』

(6) 妖星に喩えられた賊の呼称 河村秀根・益根『書紀集解』

(7) 火星の呼称 柴山久美子「記紀に表われる星——美須麻流

の珠と天津甕星——」『国文鶴見』十二号(昭和五年五月)

(8) 見え隠るる星の義 桑家漢語抄

以上のような種々の説があるが、未だ定説として確定したものは
ないようである。そこで、以下私説を述べてみたい。

二、天津甕星と天香背男の名義について

ここでは、天津甕星、別名天香背男の名義について検討してみ
ることにする。天津甕星と天香背男は同一のものを指しているわ
けであるが、便宜上、別々に考察する。

① 天津甕星について

天津甕星を語構成から分けると、「天」「津」「甕星」の三語に区
切ることができる。

「天」には、天空を表わす実質的な意味と、美称的な意味の二つ
が考えられるが、日本書紀の上記引用文に、「天に悪しき神有り。
名を天津甕星と曰ふ。」とあって、天津甕星を「天に」存在するも
のとして、明記していたことを考慮すれば、天津甕星の「天」が、
実質的な天空を意味することは明白だろう。

次に、「津」は、「天」と「甕星」を繋ぐ連体格の助詞「つ」であ
ることに特に異論は無からう。

「甕星」の「甕」は、古辞書には、次の通りにある。

- | | | |
|--------|-----|-------------|
| (1) 大甕 | 美質 | 倭名類聚抄 |
| (2) 浅甕 | 佐良介 | 倭名類聚抄 |
| (3) 甕 | 毛太比 | 倭名類聚抄 |
| (4) 甕 | 美加 | 新撰字鏡 |
| (5) 甕子 | モタヒ | 類聚名義抄(観智院本) |
| (6) 大甕 | ミカ | 類聚名義抄(観智院本) |

これらの用例から判断して、「甕」は、基本的に「みか」と訓む
ことが多く、用字から考えて、特に大きな容器を指したと思われる。
それ故、「甕」は、正訓字としては、水、酒、穀物等を入れる大き
な容器、それも多くの場合、儀式等で使う神聖な容器を指す場合と、
『古史伝』の如く、「甕(みか)は、甕速日(みかはやび)神の甕と
おなじく、伊迦(いか)と通ひて厳(いか)く大なるを云ふ言なり。」
とか、日本古典文学大系『日本書紀』のように、「ミカはミイカの

約。ミは、祇の意。イカは、嚴。」とする説のように借訓とする説とがあることになる。

そこで、「甕」の上代文献における用例について検討してみる。

「甕」の用例としては次のような例がある。

- (一) 甕速日神 (みかはやひのかみ) 古事記上巻 1例
- (二) 速甕之多氣佐波夜遲奴美神 (はやみかのたけさはやぢぬみのかみ) 古事記上巻 1例
- (三) 天之甕主神 (あめのみかぬしのかみ) 古事記上巻 1例
- (四) 甕主日子神 (みかぬしひこのかみ) 古事記上巻 1例
- (五) 甕布都神 (みかふつのかみ) 古事記中巻 1例
- (六) 甕酒 (みかのさけ) 古事記中巻 1例
- (七) 伊波礼之甕栗宮 (いはれのみかくりのみや) 古事記下巻 1例
- (八) 甕の上高知り (みかのへたかしり) 祝詞祈年祭 2例
(初穂)、祝詞春日祭 1例 (御酒)、祝詞広瀬大忌祭 2例
例 (御酒・初穂)、祝詞龍田風神 2例 (御酒・初穂)、祝詞平野祭 1例 (御酒)、祝詞久度・古関 1例 (御酒)、祝詞六月月次 1例 (初穂)、祝詞鎮火祭 1例 (御酒)、祝詞鎮御魂斎戸祭 1例 (御酒)、祝詞遷却崇神 1例 (御酒)
- (九) 甕の腹満て雙べて (みかのはらみてならべて) 祝詞祈年祭 2例 (初穂)、祝詞春日祭 1例 (御酒)、祝詞広瀬大忌祭 2例 (初穂)、祝詞龍田風神 1例 (御酒)、祝詞平野祭 1例 (御酒)、祝詞久度・古関 1例 (御酒)、祝詞六月月

天津甕星の解釈について

- 次 1例 (初穂)、祝詞鎮火祭 1例 (御酒)、祝詞鎮御魂斎戸祭 1例 (御酒)、祝詞遷却崇神 1例 (御酒)
- (二〇) 天の甕わに齋み龍りて (あめのみかわにいみこもりて) 祝詞出雲国造神賀詞 1例
- (二一) 盛りし瓮と甕 (みか) とは、今も片岡の村にあり。常陸国風土記那賀郡 1例
- (二二) 天甕津日女命 (あめのみかかつひめのみこと) 出雲国風土記秋鹿郡 1例
- (二三) 惠曇 (えとも) の池 陂を築く。・・・俗人いへらく、其の底に陶器・甕 (みか) ・甕 (しきかはら) 等多かり。出雲国風土記秋鹿郡 1例
- (二四) 伊和の里・・・甕丘 (みかおか) ・・・甕落ちし処は、・・・甕丘といひ、播磨国風土記飭磨郡 2例
- (二五) 甕坂 (みかさか) ・・・昔、丹波と播磨と、国を堺ひし時、大甕を此の上に掘り埋めて、国の堺と為しき。故、甕坂といふ。播磨国風土記託賀郡 2例
- (二六) 甕依姫 (みかよりひめ) 風土記逸文筑後国 1例
- (二七) 甕速日神 (みかのはやひのかみ) 日本書紀神代上 4例
- (二八) 甕速日命 (みかのはやひのみこと) 日本書紀神代上 1例
- (二九) 武甕槌神 (たけみかつちのかみ) 日本書紀神代上 5例
- (三〇) 武甕雷神 (たけみかつちのかみ) 日本書紀神武天皇 3例

(二一) 甕襲(みかそ) 日本書紀垂仁天皇 2例
 (二二) 甕栗(みかくり) 日本書紀清寧天皇・顕宗天皇 2

例

(二三) 三輪君甕穗(みわのきみみかほ) 1例

以上が、記紀・万葉・風土記・祝詞に於ける「甕(みか)」の全用例(但し、天津甕星の例を除く)である。これを整理すると次のようになる。

神名	10種類	19例	借訓と正訓字
人名	3種類	4例	借訓と正訓字
地名・宮殿名	4種類	6例	借訓と正訓字
容器の甕	8種類	29例	正訓字

(容器の甕には、他と重複したものがあ)

これらの用例について見てみると、神名・人名・地名・宮殿名において、「甕(みか)」は、借訓と正訓字と両様の使われ方があることがわかる。西宮一民氏の『神名の釈義』(日本古典集成『古事記』所収)に拠れば、(二)の「甕速日神(みかはやひのかみ)」の名義は、「神秘的でいかめしいことが猛烈である靈力」で、「甕(みか)」は「御蔽(みいか)」の約、「みか」の借訓とする。一方、(二二)の「速甕之多気佐波夜遲奴美神」の名義は「勢いの速い甕(みか)で、竹が爽やかな男性の主人たる神靈」とし、(二三)の「天之甕主神」の名義は、「天上界の、甕を掌る主役」、(四)の「甕主日子神」の名義は、「甕を掌る主役の男子」とし、それぞれ神名中の「甕(み

か)」を正訓字としている。

西宮一民氏が、指摘された以外のものでは、例えば、(二二)の「三輪君甕穗」は、(七)(八)の祝詞の用例で、「甕の上高知り」「甕の腹満て雙べて」とある甕の身に「初穗」があることから判断して、正訓字の「甕(みか)」で使用されている可能性が高いであろうと思われる。

以上の上代文献の用例から判断して、当該の「天津甕星」の場合も、「甕(みか)」は、借訓と正訓字の両方の名義が考えられよう。即ち、借訓の場合は、「甕(みか)」の「み」を、『古史伝』の如く接頭語「み」と見為すにせよ、日本古典文学大系『日本書紀』のように、「祇(み)」の義とするにせよ、はたまた、日本古典集成『古事記』のように、「御(み)」と解釈するにせよ、いずれも、「甕(みか)」が、「蔽(いか)」に由来すると考える点は、共通している。それ故、「甕(みか)」が借訓の場合の「天津甕星」の名義は、「天上界にある神威大なる星(の神)」「天上界にあって勢い盛んな星(の神)」と言った意味になろう。

一方、「甕(みか)」が正訓字の場合は、「天上界にある甕の如き形をした星(の神)」「天上界にあって甕のように大きな星(の神)」の謂となろう。

次に、「天香香背男(あまのかかせを)」の名義について考察してみたい。

② 天香香背男について

先ず、従来の説としては、次のようなものがある。

- (1) 香香はカカ。輝くという語、室町時代までカカヤクと清音。セヲは、兄男の意であろう。(日本古典文学大系『日本書紀』)
- (2) 香香は灼(か、)、背は佐衣(さえ)の約にて清明(さえあか)き意 平田篤胤『古史伝』
- (3) 小威を耀(か、や) かす邪神 谷川士清『日本書紀通証』
- (4) カガは赫の意、セはホシ(星)のシの音便であらう 松岡静雄『日本古語大辞典』
- (5) 耀小男(か、せを)の意であらう。 飯田季治『日本書紀新講』
- (6) 輝く男の義 武田祐吉『日本古典全書日本書紀』

以上、細かい相違点はあるが、「香香」を「輝く」の意とする点
は、諸説とも共通している。「輝く」は、上代では、「かかやく」と
清音であったとされるから、「香香」という表記は、その点でも問
題がなからう。

古辞書においても次のような用例がある。

曜 カ、ヤク 類聚名義抄(観智院本)(用字は他にも多数見ら
れる。)

また、「男(を)」も、諸説の通りに、文字通り、「男」の意に解
して良いと思われる。

問題は、諸説が分かれている「背(せ)」である。約言説は従い
難いが、セをホシ(星)のシの音便とする松岡静雄『日本古語大辞
典』の説も魅力的ではある。しかし、実際問題として、「背(せ)」
の意味は極めて難解である。一般的に男性を指す言い方と考えて良
いのだろうか。その場合も、なぜ同じく男性を表わす「男(を)」

と一緒に重複して使われているのが良くわからない。「背(せ)」
と「男(を)」を組み合わせると、「年長の男性」を表わすといった
ことがあったのであろうか。仮に、もしそうであれば、星々の中の
指導的な役割を果たす年長の男性の星ということで、意味はよく通
じることになるのであるが、ただ、上代文献から、「背男(せを)」
という用例を他に見いだすのは、困難のようである。

また、「香香背(かかせ)」を理解するための別の考えとして、
「背(せ)」を借訓と考えて、「かかす」または「かく」という動詞
の存在を想定することも必要かもしれない。後者の場合は、「かく」
に尊敬の助動詞「す」の未然形「せ」が接続した形になろう。「か
く」という動詞は、記紀の垂仁天皇の条や、万葉集卷一八、四一一
一の歌に見られるトキジクノカクノコノミという不老長寿の植物名
の中に見出される。タヂマモリが将来した、このトキジクノカクノ
コノミのカクに「光り輝く」という意味があることを先に論述し
たことがある。

このように、「背(せ)」を動詞の活用語尾、または、尊敬の助動
詞と考えた場合は、「天香香背男」の名義は、「天上で光り輝く男性」、
あるいは、「天上で光り輝いていらっしやる男性」の意味となろう。
後者の場合、神名に神や命が付いていない点が若干気になるが、も
し尊敬の意味を認めるならば、星の中でもある特定の星を指してい
る可能性が出てこよう。

以上、天津甕星と天香香背男の名義について考察してきた。その
結果、「天上界にある神威大なる星(の神)」「天上界にあって勢い
盛んな星(の神)」「天上界にある甕の如き形をした星(の神)」「天
上界にあって甕のように大きな星(の神)」「天上で光り輝く男性」

「天下で光り輝いていらつしやる男性」という種々の名義が導かれたが、これらの名義にはほぼ共通して言えることは、これが星一般の名称ではなく、ある特定の星を指した名ではないかということである。そこで、次節において、この天津甕星即ち天香香背男が、具体的に何の星に当るのかを検討したいと思う。

三、天津甕星（天香香背男）の実態

前節で見たように、天津甕星、別名、天香香背男は、星々の中でも、「神威大なる」「勢い盛んな」星、あるいは、「甕の如き形をした」「甕のように大きな」星、さらには、「光り輝く」「光り輝いていらつしやる」星と推測された。これらの特徴は、この星が、星々の中でも、とりわけ大きくて、光が強い星であることを示している。つまり、見た目も大きく、実際に光度が極めて強い星であることとなる。そこで、地球上の星で、光度が強い星を順に挙げると次のようになる。（理科年表第四二冊に拠る）

1、金星	実視等級	マイナス4・4等
2、木星	実視等級	マイナス2・5等
3、水星	実視等級	マイナス1・9等
4、火星	実視等級	マイナス1・8等
5、シリウス	実視等級	マイナス1・5等
6、カノーパス	実視等級	マイナス0・7等

このうち、1〜4は、惑星であり、5〜6は、恒星である。この

中で、何と言っても光が強い星は、1の金星である。全天で、太陽月に次ぐ明るさを持つこの星は、一番星として、また、昼間でさえ見えることがある星として、古くから日本人の注目を集めてきた。先ず光度から言えば、この金星が、天津甕星（天香香背男）として一番相応しいだろう。

次に、日本人が、上記1〜6の星をどのように把握していたかという観点から検討してみたい。

1〜6の星の中で、日本人に最も親しかった存在は、やはり、1の金星である。古く万葉集の中に、既にその例を見出すことができる。

- ①・・・明星の（明星之） 明くる朝は 敷栲の 床
の刃去らず 立てれども 居れども 共に戯れ 夕星
の（夕星乃） 夕になれば・・・（巻五、九〇四）
②・・・夕星の か行きかく行き（夕星乃 彼往此去）
・・・（巻二、一九六）
③ 夕星も（夕星毛） 通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人
壮子 （巻十、二〇一〇）

①〜③に出て来る「夕星」「明星」は、それぞれ、宵の明星、明けの明星のことであり、①では、夕べと夜明けの指標となっている。時計が一般人とは無縁の時代に、夕べと夜明けがきたことを、宵の明星、明けの明星によって知ったのであり、万葉時代において既に、金星と日本人が、親しい関係にあったことが知られるのである。一方、②〜③では、金星が、宵の明星、明けの明星として、西に行つ

たり東に來たりすることが描かれており、惑星としての金星の動きに対して、古代日本人が、正しい知識を持っていたことが伺われるのである。

また、続日本紀には、天文の記事が少なからず見出されるが、日月を除けば、金星の記事が一番多い^③。

- ④ 大宝二年(七〇二) 一二月。戊戌(六日)、星、昼に見る。
- ⑤ 養老六年(七二二) 七月。己卯(十日)・太白昼に見る。
- ⑥ 天平五年(七三三) 六月。甲辰(九日)、太白、東井に入る。
- ⑦ 天平七年(七三五) 八月乙酉、太白と辰星と相犯す。

他にも、奈良時代だけで、月による金星食が二例、金星昼見の記事が七例(一例は、松浦廟宮先祖次第并本縁起の例)あり、惑星としての動きや、他の惑星や星宿との接近状態(犯、合、同舍、入宿など)を記したものが四例ある。これらは、古代の天文観測においても、金星が注目されていたことを示している。

次に、2の木星は、古事記序文に現われるのが最古の例である。

- ① 歳(ほし) 大梁に次り、

この歳とは、歳星のことで、木星の中国名である。それ故、早くから、一部の知識人には知られていた星であることは確かであろう。しかし、金星のように上代から歌に詠まれるようなことはなかった。日本書紀に次のような記事がある。

- ② 是の夜、熒惑と歳星と、一步の内にして、乍は光り乍は没れつつ、相近つき相避ること四遍。(持統天皇六年(六九二)七月二八日)

また、続日本紀には、次の記事が見られる。

- ③ 神龜二年(七二五) 十月、己卯、昼に太白と歳星と芒角相合ふ。

②と③は、歳星と熒惑(火星)、太白(金星)の合について述べたもので、以上の三例が、上代文学における木星の全用例である。

このことから判断して、木星は、古代日本人にとって、それほど親しみのある存在ではなかったことが窺えよう。つぎに3の水星であるが、上代文献に見られるのは、続日本紀の次の記述のみである。

- ① 天平七年(七三五) 八月乙酉(二日)、太白と辰星と相犯す。

これは、辰星(水星)と太白(金星)の犯について述べたものである。日光に隠れがちで、観測しにくいいため、その後の観測記録にも木星の現われることは少ない。それ故、日本人にとって、ほとんど親しみのなかった星と言って良いであろう。

その次は、4の火星であるが、日本書紀の記述が最も古い。

- ① 天武天皇十年(六八一) 九月。癸戌(一七日)に、熒惑、月

に入れり。

これは、月による火星食（実際は犯）の例であって、他にも、神亀元年（七二四）四月一日、天平一五年（七四三）二月二五日（これも実際は犯）と、金星食の記事がある。

また、惑星現象としては、先に引用した木星の②の記事の他に、次の如き例が見られる。

- ② 養老四年（七二〇）正月。庚午、熒惑逆行す。
- ③ 養老七年（七二三）九月辛未、熒惑、太微左執法の中に入る。
- ②は、熒惑（火星）の逆行現象、③は、火星がおとめ座の一部に入ったことを示す記述で、他にも同様な記事が四例ある。さらには、昼間、火星が見えたとする記事もある。
- ④ 天平二年（七三〇）三月。庚子、熒惑、昼に見る。

但し、この時、熒惑（火星）は、金星の最大光輝（マイナス4.4）の百分の一ぐらいしか光度がなかったとされ、神田茂氏『日本天文史料』や、斉藤国治氏『国史国文に現れる星の記録の検証』では、疑問視されている。

以上、火星は、星の記録としては、多い方であるが、少なくとも上代において、金星ほど、日本人の注目を集めていたとは思われないう存在と言えよう。夏日星という和名ができるのも平安時代以降のことのようである。

次に、5のシリウスは、少なくとも上代文献において、確かな例は、一例もみられないようである。現代方言には、青星、大星、風星などの和名があることが報告されているが、それらが何時から存在するものかは、全くわからないのが現状である。

シリウスは、恒星としては、最も明るい星には違いないが、この星が天津彗星（天香香背男）とされた可能性は低いであろう。

最後に6のカノープスであるが、この星は、老人星、南極老人星、南極寿星と中国で呼ばれ、この星が現れると、天下が泰平となり、長寿を授かるというめでたい星とされてきた。このカノープスは、赤緯52.4度ぐらいなので、北緯35度前後の日本では、地平線すれすれにしかみることができない。それ故、この星を見ることは、なかなか困難であるのだが、それだけ有り難さが増して、この星が見えると、瑞祥として、お祝いをした。平安時代に老人星祭が行われたことが、それを示している。昌泰四年七月一日に延喜と改元されたのも、昌泰三年二月一日に老人星が見え、かつ、昌泰四年が、辛酉革命の年に当たっていたからだと言われている。

このように、平安時代以降の日本人には、親しい存在といえるカノープスであるが、上代文献には、この星の用例は、一例も見つかっていない。日本で、老人星という星名が一般化したのが平安時代以降なのかも知れない。用例がないことと、星の見えにくさから判断し、このカノープスが天津彗星（天香香背男）である可能性は、やはり低いと言えるのでなからうか。

以上、天津彗星（天香香背男）の候補者と言える1から6の星について、その可能性を探って来た。その結果、星の光度、上代文献における用例の多さ、古代日本人の生活との関係深さ、星としての

馴染みの度合い、等の様々な観点から判定して、1の金星が、やはり、天津甕星（天香香背男）として、一番相応しいのではないかと考える。そこで、次に、なぜ天津甕星（天香香背男）が、最後まで服従しない悪神として描かれているのか考察して見たいと思う。

四、最後まで服従しない悪神としての天津甕星

本稿の冒頭に示したように、日本書紀神代下第九段本文並びに一書第二に描かれた天津甕星（天香香背男）は、他のすべてのものが服従した後も最後まで「服はぬ」「悪しき神」として登場している。なぜ天津甕星は、最後まで服従しない悪神として描かれるのか。これは、第三節で考察したように、天津甕星が金星と比定されたことと如何に関わるのであろうか。

そのためには、金星という星の特徴を改めて検討してみる必要がある。金星は、前節で触れた通り、全ての星の中で最も光度が強い。それ故、斎藤国治氏の『国史国文に現れる星の記録の検証』に拠れば、「太白昼見（金星が昼間見えること）」の記事は、上代だけで九例、近世までの全用例を含めると五十八例も見られる。

この昼間でも見えることがある程、金星という星の光度が強いということは、天津甕星が最後まで服従しない悪神であることと深い関係があると思われる。それはなぜかという点と、一つには、全ての星の中で最も光度が強いということは、一番星として最初に現われるばかりでなく、当然のことながら、夜明けになっても、一番最後まで消えずに残っている星であることを意味するからである。

ウノ・ハルヴァの『シヤマニズム アルタイ系諸民族の世界像』に

拠れば、日本の高天原神話との関係が想像される北方系神話圏に属するイエニセイ人にとって、金星は次のようなものとされている。⁵⁾

金星は最も年長の星で、星々を危険から守り、定められた時刻より前に失せないよう気を配っていると語っている。したがって、金星は、天に「最初に現れ最後に去るもの」である。

この「最後に去るもの」とイエニセイ人に認識された金星が、最後まで「服はぬ」星として日本人に認識された天津甕星と関連を持つだろうことは十分予想されよう。星の光の強さ、色、動き、数などに関する諸民族の認識は、金星以外の他の星々について比べて見ても、極めて類似性が高いのであり、そこには人間の物の見方に対する共通性、普遍性というものが伺われるのである。まして、上述したように、イエニセイ人はシベリアの諸民族の一つであり、その北方民族の世界観は、日本神話の世界観と少なからぬ関連性があると考えられているのである。

結局、最後まで「服はぬ」天津甕星とは、明けの明星として、他の星々が消えた後も燦然とした光を放って、独り暁天に残る金星の姿を神格化したものと言えよう。また、「倭文神建葉槌命を遣わせば服ひぬ。」とあるのは、日の出が近くなって、段々とあたりが明るくなって来ると、さすがの金星も、その輝きを失って、やがて姿が見えなくなること神話化したものと、考えられるのではなからうか。⁶⁾「倭文神建葉槌命」とは、分かりにくい神名であるが、日本古典文学大系『日本書記』の説の如く、織物や着物の神とすれば、夜の暗闇を夜明け色の織物で覆ってしまえば朝をもたらすといった職

能を持った神と解釈することも可能で、もしそうであれば、この「倭文神建葉槌命」が、暗闇を織物で覆って、明けの明星たる天津甕星の光輝を奪って服従させたという事で、この神話がよく理解出来るのではないだろうか。

ところで、当該の天津甕星（天香香背男）が、「悪しき神」とされているのは、何故だろうか。これも、天津甕星が金星、それも明けの明星であることと深く関わるであろう。

上述したように、金星はすべての星の中で最も高度が強いために「太白昼見」つまり昼でも見ることがあり、実際に多数の記録を残してきた。しかし、この「太白昼見」は、中国の陰陽五行説では、兵革の兆しとされ、臣が君を損なう凶兆とされていたのである。例えば、漢書天文志には次のようにある。

太白天を經れば、天下革まり、民、王を更ふ。

「太白が天を經」というのは、「太白昼見」と同義である。これは、太白が金の精で、白帝の子であり、大将の気があるとされたので、その太白が昼間見えることは、太陽（君主）の他にも、太陽（君主）に匹敵するものがあるということになり、太白が、太陽の地位を脅かすので、凶兆とされたのであろう。

この中国の金星観が日本でも行われたことは、続日本紀の次の記事に拠っても伺い知ることが出来る。

大宝二年（七〇二）二月戊戌（六日）星、昼に見る。．．．乙巳（十三日）、太上天皇、不豫したまふ。．．．甲寅（二十一日）、

太上天皇崩りましぬ。

ここでは、太白星（金星）が昼間見えたことが、太上天皇（持統太上天皇）の崩御の兆しとなっていると考えられるのである。日本において、天皇は、太陽神天照大御神の子孫として、日の御子としての性格を受け継いでいるとされたことは、言うまでもない。それは、たとえ太上天皇となつてからでも同様であつて、常に太陽としての性格を負っていると見為して間違いない。それ故、金星は、日本においても、太陽に象徴される天子（天皇）の存在を脅かす星として認識されていた訳であつて、その意味において、「悪しき神」とされる十分な理由を有していたことになろう。

また、本稿の冒頭に引用した日本書紀の記述は、天孫降臨の記事であり、天孫降臨が悪く行われるように、武甕槌神と経津主神が、葦原中国を平定した際に、最後まで服従しない神として、当該の天津甕星（天香香背男）が登場したのであつた。この天孫降臨とは、太陽神天照大御神の孫に当る火瓊瓊杵尊が、日向の襲の高千穂峯に天降ることを指すのは良く知られている通りであるが、神話的解釈としては、冬至における太陽の復活を象徴的に表わしているとする説が有力である。そして、それが大嘗祭における天皇の即位儀礼とも深く結び付いているのは、既に指摘されている通りであるが、西郷信綱氏に拠れば、冬至における太陽の復活は、具体的には、冬至の朝に東の地平線から太陽が出現することによって表わされるという。つまり、火瓊瓊杵尊は、太陽神天照大御神の孫として、尊自身が太陽神の性格を帯びているので、火瓊瓊杵尊の天孫降臨は、冬至における太陽の地平線上への出現に他ならないと言えよう。火瓊瓊

杵尊が太陽として出現しようとしている時に、もし金星が、いつまでも光輝を放っていたとしたら、太陽（火瓊瓊杵尊）は、いつまでたっても出現できないことになってしまうだろう。つまり、金星たる天津甕星（天香香背男）は、その光輝によって太陽（火瓊瓊杵尊）の出現を邪魔している訳であるから、「悪しき神」とされて然るべきであると考えられるのである。

以上、天津甕星（天香香背男）が、天孫降臨神話において、最後まで「服はぬ」「悪しき神」とされているのは、天津甕星（天香香背男）を金星（明けの明星）の神格化と考えることで、合理的に説明できることを示した。

注

(1) 時代別国語大辞典上代編等に拠る。

(2) 拙稿、「『竹取物語』の「蓬萊の玉の枝」とタヂマモリ伝承のトキジクノカクノコノミ」（『静大國文』第三二号、静岡大学人文学部国文談話会）昭和六一年四月

(3) 齊藤国治氏『国史国文に現れる星の記録の検証』（雄山閣、昭和六一年一月）に拠る。

(4) 野尻抱影氏『日本星名辞典』（東京堂出版、昭和四八年一月）に拠る。

(5) 田中克彦氏訳、三省堂、昭和五五年一月、第二刷に拠る。

(6) 野尻抱影氏も、『星の神話・伝説集成』（恒星社、昭和三〇年一月）の中で、次のように述べられた。「私は曾て宵ノ明星となつた金星が、最大離隔の後、白昼の空にも見えて日輪をおびやかす、それが一度は

衰えるが、暁ノ明星となってから再び日輪に迫って、やがて消えてしまふのを天津甕星退治と考へてみた。しかし、ここまで天文にこだわらずとも、暁ノ明星が日光に捉えられて消えていくことだけでも十分だろう。」本稿は氏の考へと基本的には同じである。

(7) 『古事記の世界』（岩波書店、昭和四二年九月）

（補説） なお、補説として、次の点を加えておきたい。それは、日本書紀卷第九神功皇后撰政前紀に見られる左記の一文についてである。

「東にいづる日の、更に西に出づるに非ずは、且阿利那礼河の返りて逆に流れ、河の石の昇りて星辰と為るに及るを除きて、殊に春秋の朝を闕き、怠りて梳と鞭との貢を廢めば、天神地祇、共に討へたまへ。」

これは、新羅の王が、神功皇后に対して、どんなことがあつても忠誠を誓うと言つた旨を述べたもので、現実には起こり得ないことが羅列されている。その一例として、河の石が、天に昇つて天の河の星となるという一節があり、その句の中の「星辰」の訓みとして、北野神社蔵本（南北朝時代）等に「あまつみかほし」が見られる。これを基に、星一般のことも「あまつみかほし」と言つたのだという説がある。しかし、「星辰」を「あまつみかほし」と訓んでいるのは誤りかも知れない。というのは、日本紀私記では、「星辰」を「安未豆加波保之（あまつかはほし）即ち、天の河の星の意。」としており、この方が、右記の記事の解釈として意が良く通るからである。北野神社蔵本等の書写者が、「あまつかはほし」と「あまつみかほし」が類似している為、両者を混同した可能性もあろう。この点については、別の機会にさらに検討してみたいと思う。

（平成三年十月三十一日受理）